

令和7年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会 大会総評

報告者：高体連技術部員 細田学園高校 上田 健爾

大会概要

ノックアウト方式で、7月26日(土)から8月2日(土)に福島県にて開催された。各都道府県を勝ち抜いた51チームが出場した。第1試合は9:30、第2試合は12:30キックオフで行われ、70分ゲーム、勝敗が決しない場合は、PK方式によって決定した。7日間で6試合と過密な日程のため、層の厚さやコンディショニング調整が求められる。大会4日目準々決勝の日には、ロシア、カムチャッカ半島付近での地震による津波警報が出され、1試合目の試合は前半で中断することとなり、1試合目の後半と2試合目は順延となった。それでも大会運営の方々と選手・スタッフの尽力のおかげで無事大会を終えた。

最終結果は、優勝は神村学園（鹿児島県）、準優勝が天津高校（熊本県）、3位となったのは流通経済大（千葉県）、尚志高校（福島県）となった。

本県代表昌平高校は2回戦から登場し、秋田商業、阪南大高校勝利し、準々決勝で天津高校に敗れベスト8という結果であった。

決勝戦進出校分析

決勝のカードは共に九州勢同士、プレミアリーグ所属チームの実力派同士の戦いとなった。

神村学園は2回戦帝京高校（東京都）に3-0。3回戦岡山学芸館（岡山県）2-0。準々決勝山梨学園に1-1のPK戦で勝利し、準決勝は尚志高校（福島県）に2-1で競り勝ち、決勝に駒を進めた。4-3-3の基本陣形でFW⑨倉中、FW⑫伏原、FW⑬日高が前線で起点を作り、そこにMF⑭福島やMF⑩佐々木が適格にサポートしゲームを支配していく。さらにアタッキングのタイミングでは両サイドバックが駆け上がり、攻撃に厚みを増していく。戦術を実行するそれぞれ個技術・戦術理解が高いレベルにある。守備は、フロントコートでは3トップのプレススイッチに連続したプレスをかける。自コートに運ばれた際には、ディフェンスライン4枚と3ボランチの7枚プラスGKでゴール前を固め、3トップは攻撃に備える。攻守4局面で戦術行動がみられ、実行されていた。

天津高校は丸岡高校（福井県）に4-1。野辺地西高校（青森県）3-0。高知中央に7-0。準々決勝では昌平高校に5-0。準決勝では流通経済大（千葉県）にPK戦で競り勝ち決勝に駒を進めた。大会を通じて21得点と攻撃力を発揮した。4-4-2を基本陣形にし、2CBと2BOを中心に安定したビルドアップから、ボールと人が動く流動性のある攻撃を展開。どの試合でも主導権を握ることができ、相手のプレスの逆を突くことができる。守備ではボールを中心にコンパクトな陣形を保ち、前線ではハイプレス。自陣ではコンパクトに硬い組織的な守備を行う。

本県代表昌平高校

シード校である昌平高校は2回戦からの登場となった。秋田商業、阪南大高校に勝利し、準々決勝に駒を進めたが、天津高校に敗れベスト8という結果に終わった。それぞれの戦いの詳細について以下に記していく。

2回戦 秋田商業（秋田県）

昌平高校にとっては初戦となる試合で、緊張からの硬さも想定される試合であったが、ここはプレミアリーグでの経験からか硬さも見られず、序盤から昌平高校がゲームを支配した。開始早々ゲームは動

く。MF⑩山口が右サイドで起点を作り、中央に構える MF⑧人見が迷わず左足を振りぬぎ強烈なミドルシュートをゴールに突き刺す。この先制点は昌平高校にとって大きな得点となった。その後も MF⑭飯島と人見を中心とした安定ボールポゼッションから MF⑪長のラインブレイクや両 SB のクロスボールと多彩にチャンスを生み出す。25 分には長が抜け出し追加点をあげる。終始昌平がチャンスを作り出す。相手 DF の諦めないゴール前の守備で前半はさらなる追加点は奪えず、前半を 2-0 で終える。後半は、後半に入った FW⑪島田と FW⑱佐伯による中央の攻撃、相手が前に出てきたところでのカウンターを狙っていく。66 分に佐伯のシュートのこぼれ球を島田が押し込み 3 点目。中央の攻撃が利いたため DF ラインが絞気味になったところ長が抜け出しダメ押し点を決めた。終了間際に失点してしまったが、危なげなく昌平の攻撃力を存分に出した試合となった。

3 回戦 阪南大高校（大阪府）

5-4-1 のシステムで守備を固めてカウンターを狙う相手チームに対して、昌平高校がどのように切崩すかといった構図のゲームとなった。昌平高校は 1 回戦から FW を入れ替えての立ち上がりであった。昌平高校は相手コート内で横にボールを動かしながら好機を伺うがなかなかオープンチャンスは作れない。また、阪南大高校のクイックネスの高い攻撃に手を焼くシーンも目立った。苦しい展開と言えるゲームとなったが、セットプレーが昌平高校を救う。迎えた前半 28 分に獲得したコーナーキックを CB③伊藤が長身を生かしたヘディングで先制点をあげることに成功した。後半も前半同様の展開で、昌平高校は組織的には 5 バックを攻略できずにいたが、山口の突破で好機を作り出す。1 点差を追いかける阪南大高校は前半よりも攻撃に出てきたが、GK を含める守備陣が集中した守りで失点を許さない。すると、65 分に途中出場の島田が、ハイラインになった阪南大の DF ラインを抜け出しそのまま落ち着いてゴールを決めた。これを守り切り準々決勝に駒を進めた。苦しい展開の中で課題も見えた試合であったが、セットプレーや交代選手で要所を締め勝ち切ったことはチーム力を感じる試合となった。

準々決勝 大津高校（熊本県）

4-4-2 の基本システムの大津高校。個の強度も去ることながら、連動連結された組織的な守備で昌平高校の攻撃に自由を与えない。攻撃においても流動的にボールと人が動き昌平高校のボールの奪いどころ作らせない。それに対して昌平高校はミドルエリアで守備陣形を構える展開。攻撃は昌平らしく個の技術の高さを活かし、ボール保持を試みる。しかし、この攻防を上回ったのが大津高校の攻守における連動性であった。前半 29 分、見事な崩しから大津高校が先制。立て続けに昌平高校のビルドアップに対してハイプレスをかけ、奪ったところを慌てた昌平高校がファールし PK。これを決め切り 2-0。力の差を見せつけられた前半であった。ここで、ロシア・カムチャッカ半島で起こった地震の影響で、中断。一向に津波警報が収まることなく、試合は後半から翌日の開催となった。2 点を追う昌平高校は今大会、途中出場で活躍を見せている島田を投入し、前線の動きを活性化すると共に、ハイプレスをかけていく。それに対して大津高校は慌てることなく、ゲームを展開していく。昌平高校の前がかりになった守備ベクトルを的確に折り、攻撃的に位置する昌平高校の両サイドにできたスペースでフリーマンを作っていく。49 分に 3 点目。ロスタイム 2 点を加えられ、結果 0-5 で昌平高校は敗れた。

おわりに

70 分ゲームでシーズンも半ばの今大会。番狂わせも起こることが予想される中、実力校が確実に勝ち上がった結果となった。その背景には、インテンシティの高さだけでなく、決勝カードの 2 校を筆頭にこのシーズン半ばにおいても、それぞれの局面での戦術行動が浸透していることを感じた。本県代表の昌平高校も持ち前の攻撃力を発揮し、見事にベスト 8 という結果を収めてくれたが、全国優勝という目標に対してはさらなる課題が見つかった大会であってであろう。昌平高校だけでなく、県内チームのさらなるレベルアップに繋げていきたいものである。